



平成 28 年 10 月 31 日(月)
練馬区立開進第四小学校
校長 佐々木 秀之

開四小だより

11月号

大人が育てる子供の心

校長 佐々木 秀之

鮮やかな紅葉の頃となりました。子供たちは1日の運動会以降、落ち着いて学習に取り組んでいます。月末には学芸会を控え、それぞれ劇や歌を練習する声が学校中に響くようになりました。

さて、最近では学校や家庭教育に対して厳しい目が向けられるようになり、週刊誌やテレビ番組では「学級崩壊」「家庭崩壊」「児童虐待」等のタイトルを多く目にするようになりました。しかし、子供の成長にとって一番大きな影響をもつ存在は親と教師といえます。親や教師は、子供にとって常に身近にいて、精神的安定をもたらしてくれる「安心な存在」であり、生きるためのすべを教えてくれる「尊敬できる存在」でなければなりません。

「子供が育つ魔法の言葉」(ドロー・ロー・ノルト、レイナル・ハリス著)という本があります。この本の中心となっている「子は親の鏡」という詩は、かつて日本において「アメリカインディアンの教え」(この詩はアメリカインディアンの子育ての知恵を説いたものと誤解されてしまいました)という題で紹介されました。この本は主に幼児期から小学生をもつ親向けに書かれたものですが、親と教師にとってここから学ぶべきことは数多くあります。たとえば、子供によくない影響を与える言葉として「けなされて育つと、子供は人をけなすようになる」「不安な気持ちで育てると、子供も不安になる」「叱りつけてばかりいると、子供は『自分は悪い子なんだ』とってしまう」など7項目をあげており、よくない言葉をつかわない手立てが書かれています。

その例として、ジュースをこぼした子供がキッチンタオル一枚でジュースをふき取ろうとしているのを母親が見て、母親はカッとならないように深呼吸した後で、「まあ、お母さんも手伝うわ。よくやったけど、キッチンタオルより雑巾とバケツがいるわね」という例を用い、「子供の努力を認め、誉めることは大切なことです。子供は努力を認められ、誉められることによって責任感をはぐくんでいくからです」と述べ、厳しい罰を与えるよりも、子供を支え、励ました方が子供はよく学ぶものだと説いています。

よい影響を与えるものとしては、「広い心で接すれば、キレる子供にならない」「誉めてあげれば、子供は明るい子供に育つ」「認めてあげれば、子供は自分が好きになる」「親が正直であれば、子供は正直であることの大切さを知る」など12項目が挙げられています。

学芸会は子供が大きく伸びる行事の一つです。子供たちが劇や歌の練習に努力している姿を大人が認め、励まし、のびのびと表現させてあげることで、さらに自分に自信や責任感をもてるものと思います。そして、みんなで一つのものを創り上げることの喜びを味わわせるために、誉めて伸ばすことを心がけ、行事を通して大きく子供たちを成長させたいと考えています。